

マティス「ダンス」のリズムについて

1. はじめに

音楽とダンスはマティスの作品に繰り返し登場する主題である。とりわけ1909年から10年にかけては「ダンスのある静物」「ダンス」「音楽」が制作／発表されている。「ダンスのある静物」の中には「ダンス」に類似した画中画が描かれている。「ダンス」「音楽」はわずか3色のみによって描かれた簡潔な作品であり、「ダンスのある風景」の画中画もそれを踏襲している。この色彩構成を、マティスは余程気に入っていたに違いない。



図1 ダンス

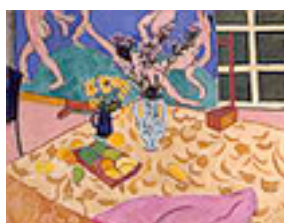


図2 ダンスのある静物



図3 音楽

これらの作品の線は単純化され、色彩も研ぎ澄まされている。「ダンス」は踊る人々を描いたのではなく、ダンスそのものを描いたのだ、ともいわれている。

「ダンス」は260cm×391cmの大作である。等身大よりもはるかに大きい人たちが踊るのはどんなダンスなのだろうか。5人による円舞はどのようなリズムに支えられているのだろうか。このレポートではこの作品の構成上のリズムと人物の動きが示唆する音楽について述べたい。なお、同名の作品がMoMAとエルミタージュ美術館に所蔵されている。ここではエルミタージュ所蔵のものを取り上げる。

2. 「ダンス」の色彩

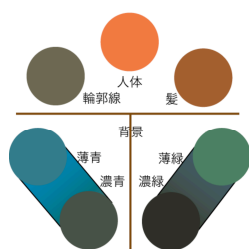


図4 「ダンス」の色彩

この作品はわずか3色のみによっている。その中の2色は背と景である。図4は用いられた色彩を抽出したものであり、人体と髪、輪郭は平均的な色を、背景の青と緑は最も明るい部分と最も暗い部分の色をグラデーションで結んでいる。

背景の青と緑で構成される場面設定は抽象的で、緑の地球の上で注に浮かんで踊っているように見える。画集

で見るとこれらの色相がかなり異なるように感じられるが、実際に分析してみると暗部では明度、彩度だけでなく色相もかなり近いことがわかった。いずれの色も人体の色に対してかなり強い緊張をもっている。その緊張は人物を隈取る輪郭線の太さによって強調されたり、緩和されたりする。その結果人体は背景から浮遊するように浮かび上がり、見るものの目は輪舞する人々の四肢の動きに吸い込まれてゆく。

3. 「ダンス」の動き

説明のために踊る人物それぞれを右のような番号で表す。



図5 踊る人物を示す番号

1) 楕円運動

作品でまず気づくのは5人の両腕によって作られる変形楕円の輪である。図6では腕の動きを単純化したオレンジ色の線で表している。楕円が歪みを持っていることによってダンスは典雅な舞踊ではなく、かなり前衛的な性格を持つものであることが示唆される。

この楕円に、①の人物の体の線と④の人物の左足の動きによって別の変形楕円が加えられる（グリーン）。さらに①の人物の右足と④の人物の右足が別の楕円（青）を描く。これら3つの楕円は歪んでいることによって動きが生まれ、互いに呼応し、共鳴するリズムを生み出している。なお、楕円運動はキャンパスをはみ出して回っている。このことが、この作品の動きを画面以上に大きなものに行っていると言えるだろう。

西洋のダンスは腕や手よりも足が基本になっているので、第2、第3の楕円については足を基準に考えた。もしも、体の線を加えれば、さらに別の楕円運動の存在も見つけることができるかも知れない。

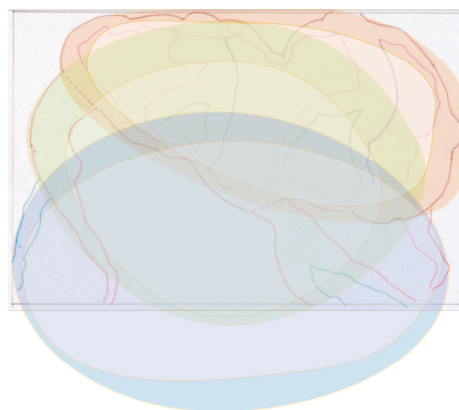


図6 「ダンス」の楕円運動

2) 両腕の楕円の中の空間分割

図7においてグリーンで表された楕円は5人の両腕で作られた変形楕円の中に作られている円運動を表している。①の人物から発せられる円弧からいくつもの楕円がまるで彗星の軌道のように重なり合いながら呼応している。ダンスが宙を浮いているような感じを受けるのはこのこととも関係があるかも知れない。

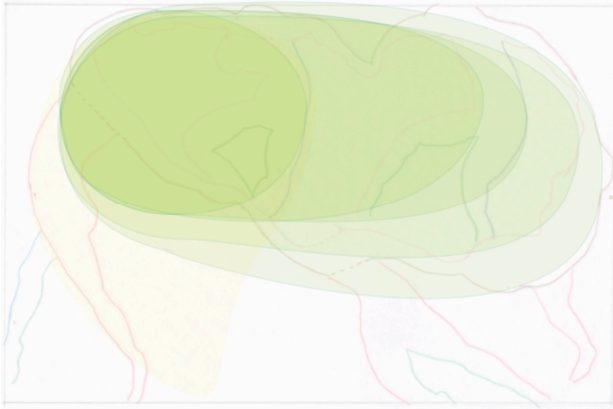


図7 両腕で作られた楕円の中の楕円

3) 地面を踏む足

5人の踊り手の10本の足の中で地面を踏んでいるのは3本だけである。その中で④の人物の右足(?)は地面を踏んではいるもののつま先立っており、体重を支えているようには感じられない。①と②の人物はそれぞれ片足で体重を支えていることが足指の動きで分かる。この2名の体の外側の線が作る楕円を図7の中の黄色で示している。他の全ての楕円が横長であるのに対してここだけが縦長になっていることが興味深い。

4) 各人物の動き

5人の踊り手はそれぞれダンスの動きに夢中である。その動きは、足の上げ方、体のねじり方、隣との関係などどれをとっても同じものはない。視線が互いに交わり合うこともなく、皆それぞれ今踊っているダンス以外に何も考えることができない。それほどこのダンスの速度は速く、止まることがない。

①の人物はこのダンスの中でキーパーソンである。胸部から左足に伸びる線が美しい。この線が他の4名の体の動きと対照的になっていることに注目したい。右手は左足の動線を増幅し、一方で、対照する右足と共に立体的な空間を作っている。左腕が②の右手につながることは現実的には不可能である。不思議な動きである。

②の人物の身体の屈曲は尋常ではない。背中線が①の胸部から右足の線と一体となって縦の楕円を形づくっていることは上述したとおりである。筋肉質の両足が際

だっている。不気味に出っ張った腹部は構成上必要だったのだろうか。

③の体の線はやさしい。足の動きも②と比べるとむしろ穏やかと言っても良いくらいである。5人の中でもっとも「ありそうな」動きをしている。一方では左足先が見えないことによって宙を飛んでいるかのようにも見える。唯一顔の見える人物である。

④の足の動きはあり得ない。左足は高く蹴り上げられ、一方の右足は左足のようにも見える。たとえ右足だとしても、右足がこれほど左に出たら転んでしまう。それなのに左手は⑤を支えている。あり得ない身体のバランスが、「踊る人物ではなくダンスを描いた」と感じさせることと関係しているかも知れない。

⑤の人物はダンスの動きについて行けず、左手で助けを求めているように見える。両足先も反り返ってしまっている。このことによってダンスはかなり速度が速く、無窮動的なものであることがわかる¹³⁾。

全ての人物の足は手よりも楕円の外側に位置しているように見える。このことは、ダンスが遠心力に抗わなければならないほど速い速度であることを暗示している。宙に浮きながら、跳び、蹴り上げ、ステップを踏む不思議なダンスである。

4. おわりに

以上、「ダンス」の色彩と構成について述べてきた。週明けに帰国してから取りかかったレポートなので、分析はきわめて表面的である。本来分析は、この作品の歴史的位置づけ、平面性や前衛性を前提に行うことが必要だろう。時間のとれるときにそれらをふまえて行いたい。

また、曲を作りたい。アメリカの作曲家がかつてクレーの作品を基に作曲している。クレーのその作品は音を直接示唆するようなものだったので、私は余りおもしろいとは思わない。その点、マティスのこの作品には響きが直接描かれていない。想像を働かせる余地が多いところに魅力を感じる。この作品を基に音楽を創作するとしたら、プレストで、刻まれ続ける拍の上に無調のハーモニーが響くような音楽ではないだろうか。

【注】

無窮動 perpetuum mobile 「常動曲」ともいう。きわめて速度の速い、たとえば16分音符の音型などの同じ動きで通された曲のこと。

【引用画像】

<http://www.ne.jp/asahi/art/dorian/M/Matisse/Matisse.htm>